

## コープふくしま 「ワァ～イわい交流会Ⅷ」開催

### 組合員が一同に集まる交流会

1月26日、年に一度コープふくしまの活動組合員が一同に集まる「ワァ～イわい交流会」が福島市のコラッセふくしまで開催されました。県内各地区で毎月1回のペースで行なわれている「コープ委員会」活動がお休みとなる1月、8月に全体で集まる機会をつくろうということで8年前から行われている交流会で、今年で8回目の開催とのことでした。なお、8月は「ワァ～イわい学習会」の名称で勉強の場という色が強く、交流会はそれに比べるとお楽しみ色強めのものと位置づけているそうです。

震災後初の開催となった今回のテーマは「みんな笑顔になれたらいいね～これからの暮らし方を考えよう！～」。会場には約100人の参加者が集まり、最初にコープふくしま常務の宍戸義広氏のあいさつでスタートしました。

「震災のこと、思い出したくないところもあるかもしれませんが、これからは福島の中で、協力しながらいろんな問題に向き合っていくことが大事なのかなと思っています。皆さんでお話して、笑顔を持ち帰ってもらえたらと思います」

続いて実行委員長の古瀬聡子さんがあいさつしました。「ワァ～イわい交流会は、今年で8回目という(末広がり)めでたい回を迎えました。8年前は福島がこんなになるとは誰も思っていませんでした。でも、これから8年たったらどうなるでしょう。『あのときはこんなことがあったよね』と笑っていられるように、できることをやっていきたいということで、そのためには笑顔にならないとたないんですよ。負けるわけにはいかないので、今回のテーマはこういうものにしました」

他4人の実行委員それぞれが自己紹介を済ませると、参加者は分科会へ。4～6人のグループに分かれて「これからの組合員活動」「震災を踏まえて考える・これからのライフスタイル」の2つから希望するお題を選び、話し合いを始めました。

### 自由なテーマで組合員が交流する

例年は、午前は講演、午後は分科会(話し合い)というプログラムでしたが、今年は午前(10:30～12:10)までに分科会を行ない、午後(12:45～13:30)はお楽しみを目的としたアトラクションという交流を行なう構成に変更されました。



今年で8回目という「ワァ～イわい交流会」の様子。

テーマが自由選択にしたところ、組合員活動について話すテーブルは6テーブル、震災とライフスタイルを話すテーブルは11テーブル、震災について話す機会を求める方が多いようでした。

最初は少し皆さん控えめでしたが、震災の経験などの話をそれぞれしはじめると、やはり共通の体験だけあってすぐに打ち解け、直後の対処、少し落ち着いてからの対処などを話し合うとともに、現在進行形の悩みを話す人には、支援の存在や相談先を紹介している方々も見受けられました。

「震災を踏まえて考える……」側のテーブルから多く聞こえ盛り上がっていた話題は、

- ・ 備蓄（冷凍食品など）の大切さ
- ・ 無駄な物は持たないスマートな生活が大事
- ・ 現金、薬などは手元に置いておく
- ・ ラジオの情報の確実性
- ・ 自転車の便利さ
- ・ 自衛隊のありがたさ など

生活についてのアイデアは、皆さんがまさに実体験から導き出した知恵と呼ぶべきものが多く、参加者同士興味深そうに耳を傾けていました。

「初めて会う方同士、年齢層もバラバラだったので、違った視点からの話が聞けてよかったです。生きていくために必要なことの優先順位を決めること。備蓄すること。それから何がだめなときは、何で補えばいいという発想が大事なのだなとあらためて思いました」（今回初めて参加したという福島市山神の山河洋子さん）。

1時間40分ほどの分科会を終え、昼食を挟んでからの午後の部は、コープふくしまの共同購入部が景品を提供しておこなった

「福島県市町村ビンゴ」、音楽に合わせて歩き、途切れたところで一番近くの人と顔を見合い、笑うというアトラクション「あはは！」などで交流し、にぎやかなひとときとなりました。最後に、それぞれのテーブルで意見をとりまとめ、実行委員より紹介されました。

プログラム終了後、実行委員長の古瀬聡子さんに話を伺いました

「組合員活動では、なり手がいない、若い人が入ってこないという問題がありますが、どういうところに人が集まるかということを考えると、それは『楽しくて、ためになる』ところ。あれが大変、



「これからの組合員活動」  
「震災を踏まえて考える・これからのライフスタイル」  
の2つからお題を選び話し合った。

これが大変、昔はこうだったけれど今はこう、というような話をする委員会には人は集まらないですね。面白かった、次も来ようと思えるかどうかのポイントは笑顔でいられること」

交流に重きを置いたのはこのあたりが理由のようでした。

分科会が始まる前には、はじめてテーブルを囲む参加者を和ませ、会話をしやすくするための「アイスブレイキング」と称した共同作業(同じテーブルの参加者全員で、紙の皿を細い棒で支えそれをゆっくり床まで運ぶゲーム)を行なうなど、和やかな雰囲気づくりに配慮していました。古瀬さんによれば「9月の東北、北海道の地連交流会に参加したメンバーが、そのまま今回の交流会の実行委員会をしています。だから、その交流会で学んだワークショップの手法を参考にさせてもらっています」とのことでした。